

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月17日現在

機関番号：34304

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820066

研究課題名（和文）ドゥルーズ哲学における言語の問題とその自然主義的記号論の生成

研究課題名（英文）Problems of Language and the Naturalistic semiotics in Deleuz' s Philosophy.

研究代表者

小林 卓也（KOBAYASHI TAKUYA）

京都産業大学・文化学部・講師

研究者番号：50611927

研究成果の概要（和文）：本研究は、哲学者ジル・ドゥルーズの思想的変遷を、言語と身体、自然主義といった観点から明らかにした。具体的には（1）『意味の論理学』から言語における物質性の問題を抽出し、これによって前期ドゥルーズ哲学の特徴づけを行った。（2）『差異と反復』における感性論の議論がいかに後期における自然主義的哲学（記号論）に結びつくかを明らかにし、言語と自然の結びつきを肯定的に論じるドゥルーズ哲学の可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to investigate the transition of Deleuze's philosophy in terms of the problems of language or the Naturalism. It consists of the following parts: Firstly, we focused on the opposition between Stoicism and Epicureanism which Deleuze employed as a model of language in *Logic of Sense*, and stated that the material or physical side in language which is discussed especially in the latter characterizes the Deleuze's philosophy of the 60s. Secondly, we extracted the aesthetics proper to Deleuze from the criticism of Kant's transcendental philosophy, which is discussed in *Difference and Repetition*, and proved that it is developed into his Naturalistic philosophy or semiotics from the 70s to 80s. Consequently, it was clarified that Deleuze's philosophy does not presuppose the separation of language and Nature or objects, and tried to connect them positively.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：思想史、フランス現代思想、ドゥルーズ、自然、言語・記号論

1. 研究開始当初の背景

これまでの研究において、ドゥルーズ哲学

は、60年代フランスにおいて興隆した人文科学における構造主義やポスト構造主義といった枠組みに位置づけられていた。このよう

な思想史的な図式が恣意的かつジャーナリストティックなものであることは明らかであるが、それに加え、本研究が問題としたのは、この図式を前提としていては、ドゥルーズ哲学における言語の問題が正しく分析されえないということであった。

すなわち、構造主義の多くが、ソシュールやヤコブソンをはじめとする言語学をモデルとして採用している。そのため、ドゥルーズにおける言語の問題もまた、その構造的な体系性に依拠する静態的な言語観に回収されてしまい、Jean-Jacques Lecercle, *Deleuze and Language* (Palgrave Macmillan, 2002)のような例外を除けば、そもそもドゥルーズ哲学に固有のものとしての言語が正面から論じられることはなかった。

しかし、前期ドゥルーズ哲学の主著のひとつである『意味の論理学』を詳細に見れば、そこで焦点化されているのは、言語の体系性や形式性ではなく、むしろ言語の身体性や物質性といった側面であり、構造主義とは異なる動的な観点から言語を論じていることが理解される。したがって、ドゥルーズが論じている言語の問題を、従来の思想史的文脈に還元することが困難であることは明らかだ。そこで、本研究では、ドゥルーズに固有の言語の問題を明らかにすることを通して、その哲学の歴史的な位置づけとその意義を改めて論じる必要があると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) ドゥルーズ哲学を言語という観点から捉えなおし、それに固有の問題を精査すること、(2) これによって、ドゥルーズ哲学の思想史の変遷を明らかにし、それが、構造主義とポスト構造主義といった従来の思想史的図式とは別の文脈に位置づけられうる可能性を模索することである。

とりわけ、本研究は、前期ドゥルーズにおける言語の問題において焦点化されるべきは、その身体性や物理性といった側面、さらには、言語と自然主義との関係であると考えられる。そして、そうした論点がどのように後期の自然哲学や、生態学的な記号論を形成したのか、なにがその展開を動機付けているのかを記述することで、その哲学全体の総合的な理論的展開を理解することが目指された。

3. 研究の方法

本研究が上述の目的を達成するために採用した方法は以下の通りである。

(1) まず、1950年代から1960年代にかけて展開されたドゥルーズの著作群を、便宜上前期ドゥルーズと区分し、それらの著作の読解を通して、当時のドゥルーズ哲学に固有の言語観、およびその問題意識の所在を明らかにすることが目指された。

とりわけ本研究が着目したのは、『意味の論理学』におけるエピクロス派の議論である。というのも、『意味の論理学』においてストア派とともに言語のモデルとして提起されているエピクロス派の自然主義には、構造主義が想定する形式的な言語体系や構造とは異なり、言語における身体性や物質性が重要視されている点が見出されるからである。またこれは、ドゥルーズ哲学の思想の変遷を考える上でも、後期において主題化される自然といったテーマへとつながる論点であると考えられた。

さらに、前期ドゥルーズ哲学が思想史的観点から見るとどのような位置づけをなされるべきかを判断するにあたり、その哲学的な問題意識を確定する必要があると思われた。そこで、本研究では、『差異と反復』におけるカントの超越論哲学に対する批判に着目し、その内容を読解、分析することで、前期ドゥルーズ全般を特徴づける問題を抽出する作業をおこなった。

ドゥルーズは、カントの超越論哲学の体系的な問題性、その理論的な脆弱さを批判するとともに、ジャン・ヴァール経由のウィリアム・ジェイムズの「根本的経験論」を念頭に置きながら、自らの哲学的企図を「超越論的経験論」と呼ぶが、そこで焦点化されるのは、「感性」である。本研究では、したがって、ドゥルーズがどのようにしてカント哲学から「感性」の議論を抽出し、そこから、後期ドゥルーズにおいて前景化される感性論 (*esthétique*)へと展開されるのかを明らかにすべく、論点の整理、その発展の道筋を確定する作業を行った。ドゥルーズ哲学の変遷を理解するにあたり、参照された先行文献においては、とりわけ Anne Sauvagnargues, *Deleuze. L'empirisme transcendantal* (PUF, 2009)が有益であった。

(2) ドゥルーズ哲学の変遷を、その自然主義的記号論の形成として総合的に記述することを目指し、次の課題が遂行された。すなわち、前期ドゥルーズにおける言語の問題において見出された、身体性、物質性、および自然主義という主題は、後期における自然哲学において、どのように展開されたのかを、概念の変遷という観点から明らかにすることが試みられた。とりわけ、本研究では、『千のプラトーン』における自然主義哲学に焦点を絞り、それが理論的文脈として前提としてい

る、スピノザとユクスキュルの生態学的議論、さらには、イェルムスレウ言語学における唯物論的議論の分析を行い、それらの理論的寄与を確定する作業を遂行した。

これらによって、後期ドゥルーズ（1960年代後半～1980年代）を自然主義的記号論として特徴づけ、その内実とそこへ至る思想史の変遷を記述することが可能となる。とりわけ参照された先行研究として挙げられるのは、従来の研究において、おそらくはじめて正面からドゥルーズ哲学を自然主義として論じた Perre Montebello, *Deleuze: La passion de la pensée* (Vrin, 2008)、さらには、ドゥルーズ哲学を物理学的観点から分析するとともに、その生物学的議論を社会的分野へと拡張しようとした著作である Manuel Delanda, *A New Philosophy of Society-Assemblage Theory and Social Complexity* (Continuum, 2006)である。

(1) (2)の方法を用いてドゥルーズ哲学の思想的変遷を辿るとともに、それを固有の自然主義的哲学ないし記号論として特徴づけることが可能となるように思われる。

4. 研究成果

(1) 前期ドゥルーズの主著である『意味の論理学』において論究されているストア派の議論については、これまでに多くの論者によって論じられ、その重要性がすでに指摘されていた。しかし、これに対して、ドゥルーズがストア派とともに、言語のモデルとして提示しているエピクロス派の意義はいまだ明確にされているとは言い難い。そこで本研究は、エピクロス派の議論に焦点を当てることで、前期ドゥルーズにおける言語の問題の所在を正しく理解するよう努めた。

その際、『意味の論理学』の付録として収録された「ルクレティウスとシミュラクル」と、その元となった論文「ルクレティウスと自然主義」を比較検討し、その修正箇所、および強調点の推移などを明らかにしたうえで、そのエピクロス派理解がどのようなものであったのかを整理、特定した。

ここから明らかとなったのは、非物質的な出来事を中心に論じられるストア派の議論に対して、エピクロス派においてはむしろ言語における物質性と身体性の議論が中心的に論じられているということであった。さらにストア派とエピクロス派の対比は、動詞と名詞、出来事と事物といったように、『意味の論理学』において前者と後者が相互に補完する役割を果たしていることが示された。また、60年代の時点ですでに、言語の問題が自然という論点と結び付けられていることから明らかかなように、後期ドゥルーズの自然哲

学へと至る理論的要因は、『意味の論理学』において見出されると考えられる。これらについては、「ドゥルーズ『意味の論理学』におけるエピクロス派解釈について」(『フランス哲学・思想研究』第17号、2012年)において詳しく論じた。

すでに述べたように、ドゥルーズ哲学におけるエピクロス派の議論に本格的に着目した研究は、本研究を除いては国内外において見られない。少なくとも本研究によって、ドゥルーズ哲学におけるエピクロス派の理論的寄与に関して議論する可能性が開かれたと思われる。とはいえ、ドゥルーズ哲学全体におけるその位置づけ、さらには議論の整合性などについて依然として不明瞭な点が多い。これらについては、より詳細な分析を踏まえ、さらなる検討が必要であると思われる。

(2) 1950年代から60年代のドゥルーズ哲学が、カントの超越論哲学の批判的読解によって形成されたことは周知の事実である。本研究では、『差異と反復』において展開されるカント批判の論点を抽出するため、とりわけカントの『純粹理性批判』における「純粹悟性概念の演繹」に対するドゥルーズの言及を分析した。そこで見出されたのは、ドゥルーズの批判の論点の中心が、カント哲学における諸能力の協働、および概念による再認によってそれらの協働が根拠づけられているという点にあるということであった。ドゥルーズは、『差異と反復』において、カントの超越論哲学を批判するとともに、そこから「感性論」を切り離し、感性に固有の役割を付与しようと試みる。これによって独自の超越論哲学を構成するというのがドゥルーズの企図であったと推定される。

こうした企図をドゥルーズ自身は「超越論的経験論」と呼んでいるが、この議論がどのような意味でカント哲学を解体することになるのか、またそこから抽出され発展させられた「感性論」が、自然の生産性という論点と結び付けられることで、どのように後期ドゥルーズにおける自然哲学や自然主義的記号論という発想へと至ったのかについて論じたものが“The Aesthetics of Nature in Deleuze’s Philosophy”(Philosophy Study, David Publishing Company, 2013) (査読有、印刷中)である。

しかし、本研究は、このドゥルーズのカント読解という論点に関して、『差異と反復』におけるマイモンの議論や、シェリングやフイヒテといったポスト・カント派の理論的寄与を検討する予定であったが、これらについての検討が不十分であった。ドイツ観念論の関係については、ドゥルーズ哲学をドイツ哲学における自然主義という哲学史的文脈との関係において位置づけるためにも、今後主

題的に論じる必要があるだろう。

(3) (1) と (2) で明らかにされた成果を踏まえ、後期ドゥルーズ哲学の主著である『千のプラトー』（精神分析を専門とするフェリックス・ガタリとの共著）における言語概念の意義を検討したのが、「ドゥルーズ哲学と言語の問題——『千のプラトー』におけるイェルムスレウ言語学の意義と射程」（『京都産業大学 人文科学系列』第 46 巻、2013 年）である。

そこで指摘されたのは、『意味の論理学』におけるストア派の言語観、スピノザにおける表現概念の延長上に『千のプラトー』におけるイェルムスレウ言語学の援用が位置づけられるということである。『千のプラトー』において見出される言語観によってドゥルーズ（およびガタリ）が企図しているのは、言語と対象、あるいは言語と自然（物質）をあらかじめ分離した上で、形式と内容の二分法によって言語を理解する（とりわけ構造主義的な）認識論的モデルを乗り越えることであるように思われる。そして、言語の質料性に着目し、言語と対象、形式と実質、あるいは言語と言語外の諸要素が、複合的に相互規定しあうという論点に、イェルムスレウの理論的寄与があることが主張された。

そして、こうした論点が、すでに、言語の静態的な体系性や形式性に依拠する構造主義的な言語モデルとは全く異なる思考の可能性を示唆していることは明らかであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① KOBAYASHI Takuya, “The Aesthetics of Nature in Deleuze’s Philosophy”, *Philosophy Study*, David Publishing Company, 2013. (査読有、印刷中)

② 小林卓也、「ドゥルーズ哲学と言語の問題——『千のプラトー』におけるイェルムスレウ言語学の意義と射程」、『京都産業大学 人文科学系列』第 46 巻、査読有、2013 年、181-194 頁。

③ 小林卓也、「ドゥルーズ『意味の論理学』におけるエピクロス派解釈について」、『フランス哲学・思想研究』第 17 号、査読有、2012 年、151-160 頁。

〔学会発表〕（計 4 件）

① KOBAYASHI Takuya, “Deleuze’s Philosophy and Problems of Language: On

the Meaning and Extent of Hjelmslev’s Linguistics in A Thousand Plateaus”（第 11 回国際記号学会、2012 年 10 月 7 日、南京師範大学、中国）

② KOBAYASHI Takuya, “The Aesthetics of Nature in Deleuze’s Philosophy”（第 5 回ドゥルーズ国際学会、2012 年 6 月 27 日、サウスイースタン・レイジアナ大学、アメリカ、ニューオリンズ）

③ 小林卓也、「超越論的経験論とは何か——前期ドゥルーズにおける「人間的自然」をめぐって」、日本哲学会、2012 年 5 月 12 日、大阪大学。

④ 小林卓也、「自然と言語 —— 前期ドゥルーズにおける言語概念について」、日仏哲学会、2011 年 9 月 11 日、大阪大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林卓也 (KOBAYASHI TAKUYA)
京都産業大学・文化学部・講師
研究者番号：50611927